

有貪と三界説

アビダルマにおける議論から

水 野 隆 道

問題の所在

貪随眠 (rāgaanusaya) は、アビダルマ教義の六随眠の一つであり、『俱舍論』「随眠品」では、冒頭から列せられる重要な煩惱法の一つである。このあとに、七随眠の分類が続き、欲界における貪を欲貪 (kāmarāga)、色・無色の上二界における貪を有貪 (bhavarāga) と分類する。六随眠は貪、瞋、慢、無明、見、疑という根本煩惱が並ぶが、七随眠の議論では貪のみを二分する。なぜ二分するかというと、欲貪と有貪は「同じ性質をもつが、しかし異なる側面をもつ」ということを強調するためである。

さらに九十八随眠説は、十随眠を三界・五部の所断で分類したものであるが、Yasomitra が「貪はすべて執着 (āgre) を行相とするもの」と註釈するように、三界に対してのおの欲貪、色貪、無色貪と三つに分類する。これは貪を三界毎に並べただけであり、これが先に「同じ」執着の性質のことである。

一方「異なる」側面を強調して分類されたのが、七随眠説の欲貪、有貪の分類である。これは三界に應じて、欲界（欲貪）と上二界（有貪）とに分類するが、ここではなぜ上二界の貪りを「有貪」というのか。九十八随眠説の「色貪」「無色貪」の分類とは、どのような点で異なるのであろうか。

確かに、膨大なアビダルマ理論の書庫である『婆沙論』の細かな議論を紐解くと、他の根本煩惱についても三界等の区分に応じた分類の議論がいくつも見られる。その中には、有部教学にとつてそれほど重要な意味を持つとは思えない分類もみられる。しかしアビダルマの綱要書『俱舍論』にも言及されるこの七随眠は、有部教学だけでなく経部の主張にも重要な意味をもつので、冒頭に列せられていると考える。

これらの問題を踏まえて本稿では、『婆沙論』『俱舍論』『順正理論』のテキストから、有部と経部の「有貪」の意味のちがいと、その三界説の関係について考察する。

0. 有貪とはどのような煩惱法か

アビダルマ仏教において、「貪」は様々な法の分類で登場する。その区分は五位七十五法の体系では不定心所法の一つであり、業説では三不善根や十悪業道、十二縁起説では第八支である「渴愛」(taṇhā)も貪の変形の一つとして取り扱われている²。そして、随眠説では本稿のテーマであるように六、七随眠、九十八随眠など多岐に渡る。

初期仏教においては、この渴愛が苦しみの原因だとするが、これらの意味を追求してゆくと(1) 渴した者が水を求めて止まない欲望と、(2) 再生をもたらす因とする、と以上のような二義がたてられる。ここで「有貪」とは、後者の(2)の意味であり、本来「生存・存在に執着する欲望」という意味である。その欲望は喜と貪を俱行し、至る処に樂をもたらし、再生を生起するものとなる。それらが業の理論と結びつ

き、三界に区分される五道輪廻再生の原因となる³。こうして貪（渴愛）はアビダルマ体系に組み込まれていく中で、原始仏教と比べてその意味が洗練、抽象化されていったと考えられる。

そしてこの中で、有貪という言葉は西村 [2002] が言及するように、原始経典では「存在に対するむさぼり」という理解であったが、アビダルマ仏教において、「上二界に存在する貪」と理解されるようになったというのである⁴。

1. 『俱舍論』における有貪

次に、アビダルマ論書における有貪についての記述を見てみよう。まず綱要書である *AKBh* 『俱舍論』における「睡眠品」の記述から引用する。

ya eṣa sūtre rāgasya bhedatḥ kṛtāḥ kāmārāgo bhavarāgaḥ' itī / ko'yaṃ bhavarāgaḥ /

bhavarāgo dvīdhātujāḥ /

rūpārūpyadhātujō rāgo bhavarāgaḥ kṛtāḥ / kiṃ karamāṇevāṃ kṛtāḥ /

antar-mukha-vārtān-mokṣasamjñā-vyāvṛtaye kṛtāḥ /

samāpattirāgo hi teṣaṃ prāyeṇa / sa cāntarmukhapravṛtāḥ. tasmād bhavarāgaḥ / uktas. . . (AKBh p. 279)

経中に、欲貪と有貪と、このように貪りの区分がされるが、この有貪とはなにか。

二界において生ずるのが、有貪である。

色、無色界にて生ずる貪が、有貪とされる。なぜ、そのようになされるのか。

内に向かうから、(また)それを解脱だとの想いを回避するために、(有貪)とされた。

確かに、彼等(上二界の有情)にとって、およそ等至への貪りである。そしてそれは、内に向かつてはたらく、それゆえに有貪と説かれた。

言貪分二、謂欲有貪。

此中有貪以何為體。

謂色無色二界中貪。

此名何因唯於彼立。

彼貪多託内門轉故。謂彼二界多起定貪。一切定貪於内門轉故。唯於彼立有貪名。(129, 99a16-a20)

貪を二に分つと言うは、謂はく欲と有との貪なり。

此の中、有貪は、何を以て体と為すか。

謂はく色無色二界の中の貪なり。

此の名は、何に因りて、唯彼れに於いてのみ立つるか。

彼の貪の多くは内門に託して転ずるが故なり。謂はく、彼の二界にては、多く定貪を起こす。一切の定貪は、内門に於いて、転ずるが故に。唯、彼に於いてのみ有貪の名を立つ。(国訳大藏經 12, p. 351)

『俱舍論』「随眠品」では、貪を欲(貪)と有(貪)の二つに分け、それぞれを欲界の貪と色、無色界の貪であると述べている。ここで有貪についての「多くは」、内門⁵に託して転ずると述べているが、この議論

は既に、『婆沙論』の中でも、「欲界の貪は外門から随増するもの、色・無色界の貪は内門随増である」と、記述されている。ことから、まず大まかな分類として理解する。

次に、定貪についての説明が続く。上二界の定中に起る煩惱のすべては、外門からの刺激に由る貪は一切なく、内省的にはたらく貪であると説明している。定中とは、いわゆる特定の境に対して專注すること（心一境性）であり、外門からの煩惱は起らないとされる。

しかし上二界とは禅定状態を表わす概念のみでない。天界に生ずる衆生の議論も付随する。「多くは内門に転ずる」という言葉が示すように、色・無色界においても、内門だけでなく、外門つまり外の所縁から転ずる貪があることを示している。この箇所では、禅定状態における外門を契機とする貪を否定しているだけであり、上二界の衆生、つまり天の神々による外門を契機とする貪を否定しているわけではない。このことについて Yasomita は「天宮に対する貪」(vinandisu raga) を挙げている⁷。これが外境によるものという明確な記述はないが、内門から起因するものとも考えにくいから、これについては検討の余地がある。

さらに、色界には香、味の色法は存在しないが、色、声、触の外境は否定しない⁸。そして、それらが貪と結びつくかどうかは、『俱舍論』では明らかにないが、後に引用する『順正理論』では色界には色声触愛⁹が存在し、これらは外境によるものであり、内を縁じて起りうるものではない¹⁰と言及する。

こうした例外を挙げつらう議論はあるものの、欲界の貪は外門によるもの、上二界の貪は内門によるものという大まかな『婆沙論』の分類は、禅定世界の特徴をよく捉えた基本的な分類としてみなせるであろう。しかし、生静慮の議論を組みこむとその分類に矛盾が生ずる。こうした経緯でこの分類は、『俱舍論』、『順正理論』を通して、厳密に修正されてゆくのである。

2. 味著等至

『俱舍論』の有貪についても一つの重要な議論が、定における味著である。

... tayoh kila dhāvov mokṣasaṃjñāvyāvartanārdham ekeṣām iti / ātmabhāva eva tu bhavaḥ / te ca sattvāḥ saṃnāpatīṇi
sāśvayām āsvādayanta ātmabhāvam eva āsvādayanti kāmavīārāgaṃvāt / atah sa rāgo bhavarāga ity uktah (AKBh p. 279)

また一部の人らが、その二界を解脱であるという想を回避するために、(有貪が説かれたと) 伝説されている。しかし、身体そのものが有である。そしてそれらの(上二界の)有情たちは、欲(界)から離れていることから、等至を所依とともに味著しながら、身体のみに味著するのである。それゆえ、その貪が、有貪と説かれたのである。

又由有人於上二界起解脫想為遮彼故。謂於上界立有貪名、顯彼所緣非真解脫。此中自体立以有名。彼諸有情多於等至及所依止深生味著故、説彼唯味著自体。非味著境。離欲貪故。由此唯彼立有貪名。(179, 99a20-25)

又、人あり、上二界に於いて、解脫の想を起こすに由りて彼れを遮せんが為の故なり。謂はく、上界に於いて、有貪の名を立て、彼の所縁は、真の解脫に非ざることを顯はす。此の中には、自体に立つるに、有の名を以てす。彼の諸の有情は、多く等至及び所依止に於いて、深く味著を生ずるが故に、彼れは唯自体を味著すと説く。境に味著するには非ず。欲貪を離るるが故なり。此れに由りて、唯彼れにのみ、有貪の名を立つ。(国訳大藏経に

以上が「随眠品」の有貪に関する記述の続きであるが、人が禪定を修するにおいて、真の解脱と誤認する禪定があるという。その定中において、その所依となっている自己存在に執着の想いをおこすことを、有(Ohava)に味著するという。これも有貪の一種であり、定中ということから上二界の貪りと理解できる。

この定中の味著については「定品」においても、味等至、淨等至、無漏等至という三種の等至の一つとして、言及されている¹¹。この中で味等至とは、その直前に起こった淨等至(世間的な善の等至)に味著することであつて、禪定修行中における落とし穴ともいえる。そういう意味で、修道に入った聖者が修する、出世間の無漏等至とは根本的に異なる。『婆沙論』では、この定に味著する代表者を、ブツダが出家してから最初に就いた師、アーラーダ・カーラーマ(Arada Kalama)とウドラカ・ラーマプトラ(Udraka Ramaputra)を挙げてはいるが、外道の入る禪定ともいえる¹²。

この定中の味等至を貪の一種とみなす根拠は、愛と相応するとしている点である。この点において、愛と定については相似点が幾つかあることから、定中の貪は愛と相応しやすいことを『婆沙論』では言及している¹³。

それには①所縁において流注して相統する、②所縁に審諦してとる、③所縁において心を繋ぎ離れざる、④所縁において摂受して転ずる、⑤諸根・大種を長益する、というこれらの特徴が挙げられていることから、定中は他の煩惱ではなく愛のみと相応するといっているのである。

ただ、ここで留意すべきことがある。定中とは心一境性で、ある特定の所縁に専注することであり、その議論の中で、所縁については外門、内門とも問わない。そこで、外門の所縁に意識を集中させる中で、貪りを起こすというのなら、姪や段食などの欲界の貪とどう異なるかという点である。それについて Yasomitra は、定中の味著は、欲界から離染しているので、感覚の対象に味著するのではなく、自体のみに味著する

と、註釈している¹⁴。このことから、定中の貪りとは、自体(有)への執着のことで、あくまでも内的なものであると考えるべきである。

3. 三界の建立

ここでは欲貪と有貪の区別を、欲界と上二界のものとするところから、いま一度三界の区分について言及する必要がある。

三界思想(欲界、色界、無色界)は、仏教学においては重要なテーマであるが、その成立についての解明は、それほど進んでいないようである¹⁵。三界については、既に阿含・ニカーヤにおいて言及されるものの、その詳しい成立ははっきりしない。

その成立背景の一つとして、仏教外からの影響を強く受けている点が挙げられる。われわれの住む物理的、精神的な世界をどう捉えて、どのように分類するかという問題は、仏教者だけでなく、インド諸宗諸学派の論師らにとっても関心事であった。したがって、仏教者たちがそれらからどのような影響を受けて、仏教独特の三界説を考え出したのかという成立の考察には、インド思想の比較、体系的研究が必要だと考える。

ただ改めて言うまでもなく、この三界の概念なくしてアビダルマ法体系は成立しない。そこでその成立解明についてはこれからの議論に委ねるとして、ここでは『俱舍論』や『婆沙論』の三界についての説明箇所を検討する。まず『俱舍論』の「世間品」から引用すると、

kāmapratīsamūyukto dhātūḥ kāmadhātūḥ / rūpapratīsamūyukto dhātū rūpadhātūḥ / madhyapadalopād / vajravālakavai,
maricāpanakavac ca / na atra rūpam asti ity arūpāḥ / arūpasya bhāva arūpam / rūpanīyo vā rūpyah / na rūpyo rūpyah
taddhāva arūpyam / taṇṇipratīsamūyukto dhātūr arūpyadhātūḥ / (AKSh p. 112)

また、何故これらは欲、色、無色界と説かれるのか。自相を保つから界である。

欲を具有する界が欲界である。色を具有する界が色界である。中の言葉を省略するから（こう言うのである。）金剛輪や、胡椒飲の如くである。そこに、色が存在しないのが、無色である。無色の体が、無色性である。或いは変壞せられるべきものが色である。色がなければ、無色であり、その体は無色性である。それ（無色性）を具有する界が、無色界である。

何故名為欲等三界。

能持自相故名為界。或種族義如前已釈。

欲所屬界説名欲界、色所屬界、説名色界。略去中言故作是説。如胡椒飲、如金剛環。於彼界中色非有故、名為無色。

所言色者、是變礙義或示現義。彼体非色立無色名。非彼但用色無為体。無色所屬界説名無色界。略去中言喻如前説。(129, 41b21-428)

何が故に、名けて、欲等の三界と為すや。

能く、自相を持つが故に名けて界と為す。或は、種族の義なること、前に已に釈するが如し。

欲の所属の界を説きて欲界と名け、色の所属の界を、説きて色界と名く。中の言を略し去るが故に、是の説を作すなり。胡椒の飲、金剛の環の如し。彼の界の中に於いて、色、有るに非ざるが故に、名けて無色と為す。言ふ所の色とは、是れ変礙の義、或は、示現の義なり。彼の体の色に非ざるに、無色の名を立つ。彼れは、但だ、色無きを用つて、体と為すには非ず。無色所属の界を、説きて無色界と名く。中の言を略し去る喩は、前に説くが如し。(国訳大藏經 II, p. 486)

AKBhでは三界の説明において、まず三界はそれぞれ自相 (svakāṣaṇa) を保つ界だとしている。それぞれ、欲界は欲 (kāma)、色界は色 (rūpa)、無色界は無色 (arūpa) を特徴とする世界であるという。そして欲界は「欲の所属の界」、色界、無色界も同様に定義し、その名称は「所属」という言葉を省略したものだとする。続いて、欲界の説明が続く。

kāmanān vā dhātūḥ kāmadhātūḥ kāmān yo dadhāti / evaṃ rūparūpyadhātu vedīavyau / ko'yaṃ kāmo nāma / samāśataḥ kavalkārāhāramārhūmopasaṃhito rāgaḥ / (AKBh p. 112-113)

或いは、諸欲を持するもの、諸欲の界が欲界である。このように色、無色界もまた、(同様に) 知るべし。この欲とは何を言うのか。概して、段食と婬とを引くところの貪である。

又欲之界名為欲界。此界力、能任持欲故。色、無色界応知、亦、然。

此中、欲言、為説何法。略説段食、婬所引貪。(T29, 41b28-c01)

又、欲の界なるを、名けて欲界と為す。此の界の力が、能く欲を任持するが故なり。色と、無色との界も応に知るべし、亦、然なり。

此の中、欲と言ふは、何の法を説くと為んや。略して段食と、姪の引く所の貪を説くものなり。(国訳大蔵經 II, p. 487)

さらに続いて、欲界の欲について具体的に言及する。それらは段食 (kavāḥkārahā) と姪 (maihuna) から生ずる貪である。段食の貪とは食欲のこと、姪の貪とは性欲である。これらが欲界の貪り、欲貪と説明する。そしてこれらの欲の特徴は、五識を介した、つまり眼耳鼻舌身識による外門からの認識によって、貪随眠が随増することである。したがって、内門に転ずるとされる有貪とは、この点で性質が異なるといえる。

この欲界と上二界における貪についての特徴は、三界の区分とともに『婆沙論』においてさらに詳細な議論が記述されている¹⁶。この箇所については、三界の建立を「愛の断」によって説明するとある。それは愛(貪)の性質について考察分類することによって、三界を区別するものである。その議論を抜粋すると、次のような表に要約できる。

	論点	欲界(色有)	色界(色有)	無色界(色無)
①	欲	欲有り	欲無し	欲無し
②	第二(※)	第二有り	第二無し	第二無し
③	境	境有り	境無し	境無し
④	衆具	衆具有り	衆具無し	衆具無し
⑤	欲・我執	欲有り、我執有り	欲無し、我執有り	欲無し、我執有り
⑥	第二・我執	第二有り、我執有り	第二無し、我執有り	第二無し、我執有り
⑦	無慚・無愧	相応する	相応しない	相応しない
⑧	慳・嫉	相応する	相応しない	相応しない
⑨	憂・苦根	相応する	相応しない	相応しない
⑩	段食と姪との愛	相応する	相応しない	相応しない

(※) 第二とは淫欲の相手たる女ほどの意味。(国訳一切経毘曇部 17, p. 24 脚注より)

この三界分別は、まず「欲界と色界は色有り、無色界は色無し」という定型句が述べられている。そして色界、無色界の区分は、色つまり物質が有るか無いかの差異だけであり、一覽からみても論点の結果は同じである。このことから、色界、無色界についての「愛の断」についての分別はそれほど意味はなく、実質欲界と上二界の区別を列挙しているにすぎない。

一つ一つの論点について見てゆくと、①の欲については具体的な内容が示されていないので、欲界の原語である kama についての一般的概念のことであり、三界説が流布して欲界の欲という概念が一般化したものと考えられる。

②④については、およそ外門から転ずる貪と一括りにできる。②は注にあるように、婬に関わる貪の特徴を示し、③は認識器官の五根が認識対象とする五境に刺激されて生起する貪り、④については物品への欲望、貪りについてであり、眼識が色（物質）を認識するということから、やはり外門を契機に起こりうる特徴を示している。

⑤⑥については先に出了た論点に付け加えて、我執について言及する¹⁷。これらは、三界すべてにわたって、我執、具体的には自己存在への執着、原始仏教でいう有愛（有貪）が存在することを示している。この記述から、『婆沙論』では欲界での「自己執着」という意味での有貪を認めているが、これが後に『順正理論』では、欲界の自己執着の煩惱を「欲貪」と解釈するのである。（これについては後で議論する）。

⑦⑧⑨までは心所法の分別であり、論点⑩は先ほどの『俱舍論』が引用した議論であり、『婆沙論』で愛と表現しているものを貪と言い換えている。

こうして見ると、この三界の建立というその分類においても、欲界と上二界について、概ね外門、内門によるものという点で区別していることが分かる。上二界を一括りにするのは、無色界があとから追加されたという経緯もあることから、この分類方法は無色界成立の前のものだと考えることもできる。

AKBhに議論を戻すと、こうして貪りを内外門という性質によって分類しつつも、あくまでも貪の本質は心、心所にあることを示す偈が続く。

na te kāmā yāni citrāṅgai loka saṅkalparāgah puruṣasya kāmah /

tīṣṭhanū citrāṅgai tathā eva loka atra dhrīṅā vinayanū kāmam //

īti gāthā abhidhānāt / (AKBh p. 113)

世間における諸のもの、それらは（真の）欲ではない。人の分別する貪が、（真の）欲である。世間における諸のものはその如く住するが、しかしそこで智者は欲を調伏する。

と、（経中の）偈に説かれているのである。

如経頌言。

世諸妙境非真欲 真欲謂人分別貪。

妙境如本住世間 智者於中已除欲。

（129、41c01-03）

経の頌に言ふが如し。

世の諸の妙境は、真の欲に非ず。真の欲は、謂はく、人の分別する貪なり。

妙境は、本の如く、世間に住するも、智者は、中に於いて、己に、欲を除く。

（国訳大藏経二、p.487）

この偈において欲の本質は、「妙境」つまり眼根などの五根で認識する「五境」に存在するのではない、五境そのものを契機として心所法としての貪が、欲の正体であると指摘する。具体例を挙げるなら、美味な食材が眼の前にあつたとしても、食欲を満たした人には食欲が湧かない。なぜなら欲の本質は、認識する食材に欲の本質があるわけではないからである。腹を満たした人には食材に対する執着が起らないように、その執着の本質は心の分別の中にあるということである。つまり、外門からの情報（つまりこの場合食材とい

う物質)を契機として貪が生起するのであり、欲界の貪であれ(無論、上二界の貪も含む)貪隨眠は、心の内部の現象であるということを強調している。

4. 有貪とは上二界のみの煩惱か

これまで『俱舍論』を中心として、有貪や三界についての記述を検討してきたが、『順正理論』では、それに対する反論が展開されている。その反論の前提となる上座(経部)の主張を、著者衆賢は以下のように言及している。

上座説有二類隨眠。「一唯欲纏、二通三界。」自興疑問。「豈、不有貪、有論説、言唯上二界。都無聖教、於色無色、偏説有声。故難依信。然於処処諸聖教中、皆以有声通説三界。豈、不於境亦説有声。欲貪隨眠不応別立。此難非理。転有異故。謂、諸欲貪於外門転。内門転者説名有貪。又如耽境与耽有異。所引隨眠差別亦爾。又縁境界、縁生身、貪対治不同故、別立二。又必損伏欲貪及瞋、外仙方能入色無色故、欲貪体非即有貪。以彼有情縁自相続、我愛隨逐恒無断故」。(T29, 600a07-418)

上座は二類の隨眠有りと説く。「一は唯欲纏、二は三界に通ず」と。自ら疑問を興す。「豈、有貪は、有る論に説いて、唯上二界と言はずや。都て聖教には、色無色に於て、偏に有の声を説くこと無し。故に依信し難し。然るに処処の諸の聖教の中に於て、皆有の声を以て通じて三界を説く。豈、境に於て亦有の声を説かずや。欲貪隨眠は別立すべからずと。此の難は理に非ず。転に異有るが故に。謂はく、諸の欲貪は外門に於て転ず。内門転は説いて有貪と名く。又耽境と耽有と異なるが如し。引く所の隨眠の差別も亦爾なり。又境界を縁すると、

生身を縁ずるとの、貪の対治不同なるが故に、別立して二とす。又必ず欲貪と及び瞋とを損伏するに、外仙は方に能く色無色に入るが故に、欲貪の体は即ち有貪に非ず。彼の有情は自の相続を縁じ、我愛隨逐して恒に断無きを以ての故なり」と。(国訳一切経毘曇部 29, p. 135)

上座(経部)は有貪を上二界でなく、三界にあるという。というのは、有貪の語は「有」の「貪」であり、有とは有情を指す三有(Tridhava)のことである。したがって、欲界も含む三界の有情すべてに有貪があるのではないか、と経部は主張する¹⁸。

ここでは欲貪と有貪の区別を、内門か外門か、その境に耽るかその生身(有)に耽るかという区別を上座の主張として最初に挙げているが、これは『俱舍論』とも相違ない。さらにここでは「賢聖品」で検討される貪の「対治」(prātipakṣa)についても、根拠に付け加えられている。外門より転ずる貪りには不浄観、内門の貪りには数息観とあるように、対治の不同も欲貪有貪分別の理由として挙げている¹⁹。

さらに、外仙(śrāpa)は欲貪と瞋を断つて上二界に入るという前提がある。しかし彼等は常に欲界であるうと上二界であろうと一相続の我愛を持つ。そこで、欲界繋の一切の煩惱は欲貪であると有部は主張するが、欲界の我愛を欲貪というなら、欲貪を断ち上二界に入ると言い方はおかしいと主張する。この理屈から経部は、欲界でも「自己への執着」という意味での有貪は存在する、というのである。

ここで、『順正理論』における、貪随眠の分類についての経主(経部)と有部の貪の分類の違いを表にまとめると次のようになる。

經主（經部）の立場		『順正理論』（有部）の立場	
上二界	内門 有貪 ・解脱と勘違いする 定（味等至）	外門 （・天宮へ貪） Yasomitra 註より	内門 有貪 ・解脱と勘違いする 定（味等至）
欲界	有貪	欲貪 ・段食、姪	欲貪 ・色声触愛
欲界	欲界	欲貪	欲貪 ・段食、姪

衆賢によれば、欲界の煩惱はすべて欲貪であり、欲界の衆生の「自己への執着」の煩惱も、欲貪とみなしている。この点が經部と大きな違いである。そして、さらにこの立場で衆賢は經部へ反論を続ける²⁰。

また「有」は三界の衆生に限らず、業有も中もあるという「七有經」を根拠に挙げ、有貪の有は三界の衆生（三有）を指すに限定しない。また定中にも外門による色声触による貪があることで内門、外門の区別は不十分だというのは、先にも述べた通りである。そして經部は、不淨觀、數息觀という貪の対治法を主張するが、衆賢はこの二つでは不十分であり、色声等の諸境界ごとにそれぞれ異なる対治が必要であり、また色無色界の対治も別々であるということから、対治法は多岐に渡るのだという。そして外仙が我愛を持ち続けるという点は、欲界と上二界の我愛は別物であると主張する。

このように『順正理論』では、經部のどの主張に対しても、様々な理屈を持ち出しては、反論に反論を重ねていることから、議論が複雑化し結局なにか言いたいのかわかりにくい。したがって単純な点を見落としたり、論理矛盾に陥って堂々巡りの議論が展開されていることがしばしば見られる。いずれにしる經部と有部の主張の違いは、先の表の通りになる。

まとめ

本稿のテーマは、有貪と三界説の対応関係の考察であり、有貪をどのような意味で捉えるか、という有部と経部の違いを明らかにするものである。ただこの事例のように、欲界と上二界の分別にそれぞれ欲と有という語を冠する煩惱法の分類は、貪随眠の七随眠説だけに限らない。それは、『婆沙論』に詳しく論じられるように、三漏、四軌、四暴流などの煩惱分類にも見られる²¹。

この問題については、櫻部〔20〕も指摘している²²が、有貪は、阿含・ニカーヤにおいては「自己存在への執着」の意味である。経部は、欲界、上二界という点を問題にせず、内門に転ずる貪りを、それらを阿含・ニカーヤ時代の意味で「有貪」とよんだ。それに対し『順正理論』における有部は、あくまでも三界の建前を重視した結果、欲界の衆生の生存欲は欲貪とした。

では有部は、なぜ上二界の貪を色貪、無色貪といわず有貪としたのか。実際 AKB₁に見られる他の煩惱分類、五上分結の分類では、貪を三界に應じて、色貪と無色貪の事例もあり、これだと簡潔に三界説と対応する。

その理由として、まず貪りの種類を内門外門という観点から、生存欲と五根の外境からによる欲（五妙欲）とに分けた。それが有貪と欲貪の原型であろう。それに定中であるか、あるいは散心の状態であるか、という禅定の様相が重ねられ、その心の状態の特徴が加味されていたのであろう。そしてその後、三界に無色界が成立した後に、上二界の貪を「色貪」と「無色貪」に分けていったと考えられる。この有貪の問題から、煩惱分類を重視した有部と、それらに一定の理解を示しつつも本来の意味に立ち返ろうとした経部との解釈の対立が見てとれるのである。

1 AK17, p. 446.

dhātubhedāḥ kāmāvacaraḥ rūpāvacaraḥ āruḥyāvacara itī / tatra rāgaṇuśayaḥ prakāradhātubhedābhyāṃ pañcadaśavidha itī / *śāstra* paraspāram ākārabhedo nāsti / sarvo hi rāgaḥ sakyākāraḥ / tasmān nākārabhedena vyavasthāpyate /

界の区別とは、欲（界）繫と、色（界）繫と、無色（界）繫と（の三つ）である。その中で、貧睡眠は種と界との区別によって十五種類であると（される）。それには相互に行相の区別はない。というのは、貧はすべて執着を行相とするからである。したがって行相の区別によっては（種類は）立てられない。

2 「愛」(maṇā)と「貪」(rāga)の語句については、アビダルマ論書では混合して使われている。したがって本稿においては同義語として扱う。例えば『婆沙論』にも「云何愛結。謂三界貪。然三界貪於九結中總立愛結。」(T27. 258a16-17)と見える。また「愛」という訳語は、例えば染汚の愛（貪）と不染の愛（信）と使い分けることもあり、これらの言葉は、箇所ごとに行間を読んで使い分ける必要がある。

3 雲井昭善「原始仏教に現れた愛の觀念」（仏教思想研究会編『仏教思想Ⅰ 愛』平樂寺書店1975年、第2章に収録）pp. 58-59。
4 西村 [2002]、p. 264。

5 内門と外門については、十八界の内、六根と六識の十二界が内門（所依止になるもの）、そして六境が外門である。『婆沙論』にも、次のようにある。「心上仮立我名。此我所依立為内处。我所縁者立為外处。」(T27. 381b02-03)。

このような議論から、識のはたらき方について、識が認識の所縁に向かう働きを外門転、所依に向かう内面的はたらきを内門転という。

6 『婆沙論』(T27. 258a28-402)。

「隨増義是隨眠義。以欲界貪外門隨増。色無色貪内門隨増故立二隨眠。染境義是愛義。以所染著欲色無色境有差別故。立三界愛。」

7 AKIy, p. 444.

saṃpātīrāgo hi teṣāṃ prāyeṇeti / āsvādanāsaṃprayukte dhīyāṇe prāyeṇa teṣāṃ rāgāḥ / vimānādiṣv api teṣāṃ rāgo 'stīty
ataḥ prāyeṇeti grahaṇam/

かれら（上二界の有情）にとつて（の貪）とは、概ね、等至への貪でありとは、かれらにとつての貪とは、概ね、味相應の静慮に対するものである。かれらには天宮に対する貪もあるので、それゆえ「概ね」と言ったのである。

8 加藤 [1989]、p. 328。

9 『俱舍論』 (T29, 7b29-c02)。

「色界所繫唯十四種。除香味境及鼻舌識。除香味者段食性故。離段食欲方得生彼。除鼻舌識無所緣故。」
十八界の分類で、色界では鼻舌識、香味境の物質はないと考える。また段食は香・味・触の色法を体とするものであり、飲食物のことであるが、それらは欲界のみに存在すると考える。

10 『順正理論』 (T29, 600a29-b02)。

「若唯緣内貪名有貪。則色界中色声觸愛。非緣内起應非有貪。則諸隨眠應立有八。」

六隨眠の貪を欲貪、有貪と分けて七隨眠にしたように、さらに有貪を内転のものと同外転のもの貪と分けて、八隨眠説を立てるといふ記述である。

11 『俱舍論』 (T29, 146b24-c01)。

「初味等至。謂愛相應。愛能味著故名為味。彼相應故此得味名。淨等至名目世善定。与無貪等諸白淨法相應起故。此得淨名。即味相應所味著境。此無間滅彼味定生。緣過去淨深生味著。爾時雖名出所味定。於能味定得名為入。」

12 『婆沙論』 (T27. 257c17-c22)。

「以補特伽羅故者。欲貪隨眠如難陀等。瞋恚隨眠如氣噓指鬘等。有貪隨眠如遏璽多阿邏茶囉達洛迦等。慢隨眠如傲士等。無明隨眠如鄔盧頻螺婆迦葉波等。見隨眠如善星等。疑隨眠如摩洛迦子等。」

13 『婆沙論』 (T27. 815a03-a19)。

「問何故但說与愛相應非余煩惱。…(中略)…有說。此中說相似者。謂愛与定相似非余煩惱。所以者何。定於所緣流注相續愛亦如是。復次定於所緣審諦而取愛亦如是。復次定於所緣繫心不離。愛亦如是。復次定於所緣。攝受而轉愛亦如是。復次定能長益諸根大種。愛亦如是。諸余煩惱無此相故不說相應。」

14 AK1y, p. 445.

ātmabhāva eva tu bhava ity ācāryamatari / samāpātiṅ sāsrayān iti. samāpātiṅ sātumahāvān / āsvādayanta ātmabhāvam evāsvādayanti. na kāmaguṇān. kāmavītarāgatvāt /

しかし、(有情の) 自体が有そのものであるとは、軌範師の考えである。等至を所依とともには、等至を自体とともにということである。(それに) 味著するときには、欲(界)からの離染をすでに果たしているから、(五種の) 感覚の対象に(味著することは)なく、自体のみに味著するのである。

15 原始仏教から部派仏教の三界成立の考察についての研究は、中村元選集「決定版」第16巻『原始仏教の思想Ⅱ』春秋社、pp. 679-728、1994年、藤田宏達「三界説について」『印度學佛教學研究』16号、pp. 59-62、1960年、立川武蔵「『俱舍論』における界について」『印度學佛教學研究』116号 pp. 1-10、2008年など。

16 『婆沙論』 卷百九十三 (T27. 965c1-4.966a18)。

「三界云何建立。為以地為以処為以愛斷耶。設爾何失。若以地者応説九界地有九故。謂欲界四靜慮四無色。若以処者。応説四十界有四十処故。謂欲界二十処。色界十六処。無色界四処。若以愛斷者。亦応説九界。謂欲界

愛乃至非想非非想処愛。各分齊有異故。答。心說以愛斷故建立三界。問。若爾。心立九界。答。同類愛斷故唯立三界。謂從無間地獄乃至他化自在天皆由欲愛所差別故建立欲界。從梵衆天乃至色究竟天。皆由色愛所差別故建立色界。從空無辺処乃至非想非非想処皆由無色愛所差別故建立無色界。復次若処有色有欲立欲界。有色無欲立色界。無色無欲立無色界。復次若処有色有第二立欲界。有色無第二立色界。無色無第二立無色界。復次若処有色有境立欲界。有色無境立色界。無色無境立無色界。復次若処有色有衆具立欲界。有色無衆具立色界。無色無衆具立無色界。復次若処有色有欲有我執立欲界。有色無欲有我執立色界。無色無欲有我執立無色界。復次若処有色有第二有我執立欲界。有色無第二有我執立色界。無色無第二有我執立無色界。境及衆具說亦爾。復次若処有色無慚無愧相。心立欲界。有色無慚無愧不相。心立色界。無色無慚無愧不相。心立無色界。復次若処有色慚嫉相。心立欲界。有色慚嫉不相。心立色界。無色慚嫉不相。心立無色界。復次若処有色憂苦根相。心立欲界。有色憂苦根不相。心立色界。無色憂苦根不相。心立無色界。復次若処有色段食姪愛相。心立欲界。有色段食姪愛不相。心立色界。無色段食姪愛不相。心立無色界。」

(以下議論は続くが、該当箇所のみ掲載。)

17 『俱舍論』(T29, 9c17-a19) 27、「我執」(ahankāra) は内門・外門分別の依止となる、とある。

「六根六識十二名内。外謂所余色等六境。我依名内。外謂此余。我体既無内外何有。我執依止故。仮説心為我。」この意味は、世俗諦としての我を認め、六識心王を我と仮立して、我執を内門転の依止としている。このことから、内外門分別自体が自己への貪り(有貪)を前提としていることは、注目に値することである。

18 この「有貪は三界に通じる」という箇所は、『順正理論』では経部の主張とするが、『俱舍論』では確認できない。

19 『俱舍論』(T29, 117b14-b16)。

「有余復言。此時息念內門轉故能止乱尋。不淨多於外門轉故。猶如眼識治彼無能。」

20 『順正理論』(T29, 600a19-629)。テキストは字数の関係で省略した。

21 これら煩惱法を三界に分類する例は『婆沙論』に詳しく見られる。それらを纏めると次のようになる。

	欲界	上二界	その他	『婆沙論』頁
三漏	欲漏	有漏	無明漏	(T27, 243c20)
四漏	欲漏	有漏	無明漏、見漏	(T29, 247b20)
四軌	欲軌	有軌	無明軌、見軌	(T27, 247b22)
四暴流	欲暴流	有暴流	無明暴流、見暴流	(T27, 247b23)
四取	欲取	我語取	戒禁取、見取	(T27, 247b28)

22 櫻部 [1955] pp. 24-25 参照。

(略号)

AKBh : P.Pradhan ed., *Abhidharmakośābhāṣya*, Patna 1967.

AKIy : U.Wogihara ed., *Abhidharmakośāyākhyā*, Tokyo 1932-36 山喜房佛書林,

『婆沙論』: 『阿毘達磨大毘婆沙論』(玄奘訳 T27, No. 1545)

『俱舍論』: 『阿毘達磨俱舍論』(玄奘訳 T29, No. 1538)

『順正理論』: 『阿毘達磨順正理論』(玄奘訳 T29, No. 1562)

加藤 [1989]: 加藤純章 『経量部の研究』春秋社, 1989年.

櫻部 [1955]: 櫻部建 『九十八随眠説の成立に關して』『大谷学報』35(3), pp. 20-30, 1955年.

西村 [2002]: 西村実則『アビダルマ教学 俱舍論の煩惱論』法藏館, 2002年.

(参考文献)

- ・小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究随眠品』大蔵出版, 2007年.
- ・加藤純章『経量部の研究』春秋社, 1989年.
- ・櫻部建「九十八随眠説の成立について」『大谷学報』35(3), pp. 20-30, 1995年.
- ・櫻部建・小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究智品・定品』大蔵出版, 2004年.
- ・佐々木現順編『煩惱の研究』清水弘文堂, 1975年.
- ・西村実則『アビダルマ教学 俱舍論の煩惱論』法藏館, 2002年.
- ・西村実則「初期インド仏教にみる天界と出家」
- 『大正大學研究紀要、人間學部・文學部』94, pp. 1-28, 2009年.
- ・水野弘元『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』山喜房佛書林, 1964年.
- ・山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明世間品』法藏館, 1955年.
- ・仏教思想研究会編『仏教思想1愛』平楽寺書店, 1975年.

(当論文は平成26年度臨濟宗妙心寺派花園大学研究助成の成果である。)